みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

特別インタビュー 吉田憲司館長：ついに来た「民博の時代」！？：これまでの6年、これからの6年

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 憲司, 卯田, 宗平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009846

特別インタビュー　吉田憲司館長　聞き手 卯田編集長

ついに来た「民博の時代」!?

―これまでの6年、これからの6年

2020年6月24日、民博の正門前広場に立ち上げられたトーテムポール。民博の新たなシンボルとなった。

2016年度から始まった第3期中期目標・中期計画が2021年度で終了する。2022年度からは、新たに第4期の6年間が始まる。この6年間、民博は何をやってきたのか。そして、これからどこに向かうのか。

吉田（よしだ） 憲司（けんじ）

国立民族学博物館長。専門は博物館人類学、アフリカ研究。
主な著書に、『仮面の森―チェワ社会における仮面結社、邪術、憑霊』（講談社 1992年）、『文化の発見』（岩波書店 1999年）、『文化の肖像』（岩波書店 2013年）、『宗教の始原を求めて―南部アフリカ、聖霊教会の人びと』（岩波書店 2014年）などがある。

卯田（うだ） 宗平（しゅうへい）

国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授。『民博通信 Online』編集長。
専門は生態人類学、環境民俗学。
単著に『鵜飼いと現代中国』（2014年）、編著に『野生性と人類の論理』（2021年）、『アジアの環境研究入門』（2014年、いずれも東京大学出版会）などがある。

キーワード

中期目標とは国立大学法人などが6年間に達成すべき事業に関する目標のことです。中期計画とはその目標を達成するために作成された6年間の計画のことです。第3期は2016年度から始まり、2021年度に終了します。第4期は2022年度から6年間です。

卯田　今号では、館長へのインタビューをお届けします。今回、インタビューを企画した背景には2つのタイミングがあります。

1つは、2016年度から始まった第3期中期目標・中期計画（左下のキーワード欄を参照）が2021年度で終了し、2022年度からは新たに第4期の6年間が始まります。いま、まさに次期に向けた動きが加速しています。こういうタイミングにこれまでの成果と課題、これからの展望について伺いたいと思います。

もう1つは、吉田館長ご自身も2017年4月から館長職に就かれ、そのリーダーシップのもとで民博の運営に携わり2020年3月に4年の任期が終了しました。その後、さらに2年の任期のなかで第4期に突入するタイミングになります。当初、ご自身が思い描いていた民博と、実際に館長職に就いてからの民博との違い、課題や展望をお聞かせください。

まずは2016年から始まった第3期について全体としてどのような感想をお持ちでしょうか。

吉田　私自身は、第3期の2年目に館長に就任してこれまで4年の間、懸命に館長職を務めてきただけですが、今回、文部科学省の国立大学法人評価委員会や、大学改革支援・学位授与機構、大学共同利用機関改革に向けた外部検証などからいろいろなかたちでの評価・検証を受けて、それぞれに表現の違いはありながらも、文化人類学・民族学に関する国際的な研究拠点、研究のネットワークのハブとしての役割を十分に果たしているという高い評価をいただきました。地震・台風の被害、そしてこの新型コロナウイルス感染症の蔓延といった、さまざまな困難な状況はありましたけれども、それを乗り越えて民博は第3期を通じて順調に活動を展開できたのではないかと思っています。

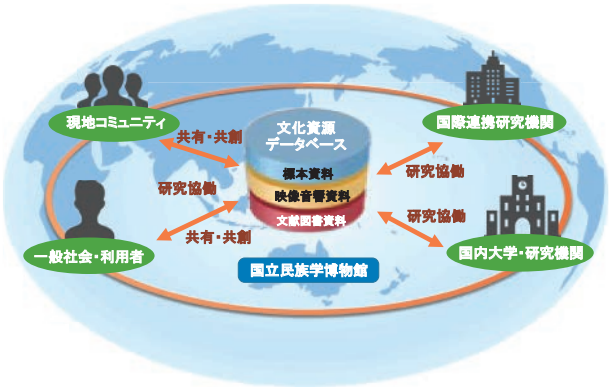
民博の研究活動はどうだったか

卯田　民博には「研究活動」と「博物館活動」という大きく2つの柱があります。まずは研究活動についてお伺いします。第3期では、新たに開始した特別研究や、フォーラム型情報ミュージアム、公募型の共同研究など、さまざまな地域や時代を対象とするプロジェクトを推進してきました。それらの成果についてはどのようにお考えでしょうか。

吉田　研究活動としては、特別研究が順調に、当初予定通りのかたちで展開できたうえに、さらにコロナ禍にあたって「現代文明と感染症」という特別研究の緊急枠を設けて、研究をスタートしてもらいました。さきほどの各方面からの評価でも、その点についても高い評価をしていただいているところです。もちろん、研究自体の展開は、まだまだこれからですけどね。この「現代文明と感染症」の特別研究のプロジェクトは、これから3年間続いていくので、第4期中期目標・中期計画期間にもかかりますが、重要な課題なので期をまたぐかたちで推進してもらうことになります。一方で、第4期に入れば、また新たなかたちでの特別研究を1年目の2022年度から走らせることになるので、いくつかのプロジェクトが重なる状態で展開していくことになります。

第3期、民博の活動のフラッグシップとして挙げてきたのが、1つは特別研究、もう1つがフォーラム型情報ミュージアムの構築でした。このフォーラム型情報ミュージアムの構築は、第3期だけでも合計21のプロジェクトが同時並行的に進んでいます。地域的にみても、全体でほぼ全世界をカバーするかたちで、それぞれのプロジェクトが走っているという状況です。

34年前の映像作品の里帰り上映会。泣いて、笑っての2時間となった（2016年、バトゥレチョール、南真木人撮影）。



フォーラム型情報ミュージアムの概念図

ここでいうフォーラム型情報ミュージアムというのは、民博の所蔵する標本資料（モノの資料）や映像音響資料の情報を、研究者や博物館利用者だけでなく、標本資料ならそれをもともとつくっていた、あるいは使っていた現地コミュニティ――ソース・コミュニティといいますが――の人びと、あるいは映像音響資料、とくに写真ならそれが撮影された現地コミュニティとの人びとと共有して、一緒にデータベースのなかでその情報を育てていって、研究者の側は研究活動に反映させ、コミュニティの人びとはコミュニティ活動に反映させていくということを目指して進めてきたプロジェクトです。ここでの情報とは、ただ名前が間違っているとか、使用法はこうなんだ、などだけではありません。それぞれのモノについてコミュニティの人たちに経験や記憶を語ってもらって、それも情報として映像に収めてデータベースに取り込んでいます。

そういうプロジェクトに関わってくれる現地の人たちに話を聞くと、自分たちは民博のデータベースを充実させようという以上に、自分たちの記憶、経験をここにためておいて、自分たちが実際に会うことがないかもしれない子や孫の世代に、自分たちの経験なり知識なり記憶というものを伝えたいんだ、だから積極的に関わっているんだとおっしゃいます。皆さん、資料の熟覧のために民博に来られたときには、この館長室にもご挨拶に来られますけど、私の手を取って涙を流される方もいらっしゃいます。「自分たちのところには祖先がつくったものが残っていない。よくこういういい状態でいままで保っておいてくださいました」というふうに言われるんです。

このフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトを通じて、民博は、ただの博物館であるだけではなく、人類の記憶の創造的な継承の装置になっていると思っています。

もともとこのフォーラムという考え方は、私が博物館展示

十分なディスタンスを確保しておこないました。

について使った言葉でした。博物館の展示をつくる側、展示を見る側、そしてその展示の対象者となっている現地コミュニティの人びと。この三者の間の交流と相互の啓発の装置であり、そこで新たな挑戦なり、新たな知識、経験をつくっていく場所という意味で使っていました。それがフォーラム型情報ミュージアムというプロジェクトを通じて、フォーラムという考え方が研究情報の蓄積のあり方に適用されました。

それだけではなく、このプロジェクトに関わっていくと結局、現地での我々のフィールドワーク自体が変わってきます。実際に古い写真を現地に持っていくと、みんなが、「自分のひいじいちゃんだ、ひいばあちゃんだ」とか、「壊れてなくなった前の家だ」とかと言って大騒ぎになり、涙を流して喜ばれます。そういうことを積み上げていくなかで、フィールドワーク自体がいわばフォーラム性をもつようになり、人類学の研究そのものもフォーラム化するという動きにつながってきているのだと思います。このフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトを通じて、フォーラムという概念が、展示だけではなく、資料情報の蓄積のあり方、さらには研究のあり方にまで徹底されてきている。そして、その結果、人類学のフィールドワーク、そして人類学そのものを歴史化するという機能も果たしているという気がしています。

ですから、このフォーラム型情報ミュージアムについては各方面から非常に高い評価をしてもらっています。博物館の収蔵資料データベースを現地社会と共有して、彼らの声を博物館活動に反映していくというプロジェクトは、いま世界各地で、とくに先住民族と協働しながらおこなわれていますけれども、1つの博物館が全世界を対象にそういう活動をしているというのは民博しかない。そういう意味でも、民博の先導性を非常にたしかなものにしてくれている活動だと思っています。

昨年は、さらにその発信の装置として、『*TRAJECTORIA*』という国際マルチメディア・オンラインジャーナルを創刊しました。これは、動画そのものも論文として組み込めるようなジャーナルですが、フォーラム型情報ミュージアムの活動も、この『*TRAJECTORIA*』を通じて、文字通り現地にも届き、世界と共有化できるようになってきています。これは当初、5年前、第3期の初めにはまだ構想していなかったわけですから、予定以上の進捗を見せた部分だろうと思います。

卯田　たしかにフォーラムというアプローチは、他者理解の難しさを乗り越える新しい方法だと思います。これまでの人類学では、参与観察による実証主義の限界が指摘されたり、現地のことは現地の人にしかわからないという当事者主義の考え方も示されたりしてきました。その前提として、文化的な他者による一方的な表象の問題がありました。ただ、このフォーラムという方法では、そうした議論を乗り越えて、当事者と調査者との関わりのなかから自画像と他者像を同時に理解できる可能性がある。他者への関心や自文化理解がさらに求められる現代において重要な方法論です。すでに5万点以上の標本資料に90万件以上のデータを付与している。いずれにせよ、第3期で進んだプロジェクトといえます。もちろん、これ以外にも公募型の共同研究では多くの成果刊行物が出ましたし、南アジア、北東アジア、中東の地域研究も進みました。

吉田　公募型の共同研究というのは、民博の研究活動の大黒柱です。民博の大学共同利用機関としての活動の中核となっているのは、やはりこの公募型の共同研究活動だろうと思います。

最近では本数をやや限定するようにしてきており、走っている数よりも、むしろそれぞれの研究活動を充実させるような方向で審査時に絞り込みをしていますが、それはある種、必然的な展開だったと思います。というのも、たくさんの共同研究が走っていても、それぞれの研究会の開催回数が非常に少ないとか出席率が低いとか、そういう共同研究も散見されたからです。そして数を絞り込んだ結果、開催回数も参加率も非常に高くなっています。そういう意味で、それぞれの共同研究が充実した活動になったと思います。

ただ、この2年間はコロナ禍のために対面での共同研究会ができず、ある種、危機であったんですが、オンラインによる開催が可能になって、かえって研究活動のすそ野が広がった感があります。

これは特別研究、フォーラム型情報ミュージアムなどでも同じですが、結果的に国内研究者をおもなメンバーとする共同研究でも、国外の非常に先導的な研究をしている研究者にもピンポイントで講師の依頼ができるようになりました。忙しい研究者を日本に招いて頻繁にシンポジウムを開くのは、

なかなか難しいという状況がありました。しかし、オンライン化のおかげで研究自体が世界に開かれたといえるように思います。

コロナ禍のなか、海外でのフィールドワークは文字通り手も足も出ないという状況ですけれども、一方、研究会活動は従来よりもはるかに活発におこなわれるようになったのではないでしょうか。とくに海外の研究者も参加する研究会では、それぞれの研究者の住んでいる土地の現地時間に合わせて連続して開催していく連続ウェビナーが開催されて、ある日は日本時間の朝7時からやるし、ある日は夜の9時からということもあって、全部つき合うのは大変でしたけれども、非常に熱のこもった、有意義なシンポジウムが実施できたと思います。

それぞれのプロジェクトで、最終的にはみんな、渡航が可能になったら対面でのシンポジウムを開催することを考えているのだろうと思います。これからそれがいろいろなかたちの出版物に結実していくことを期待しているところです。

この間、フィールドワークができないときには、「実際に海外に出ているときにはできない仕事というのはたくさんあるから、それに時間を注いでください」と皆さんにお願いしてきました。卯田さんのように『野生性と人類の論理』という大きな本をまとめた方もいらっしゃるし、出版活動も成果の発信も、この時期に余計に活発になっているというところがあるだろうと思います。

卯田　民博の公募型共同研究の特徴は、自由なテーマのもとで自由に研究者を組織して進められることです。とくに、中堅や若手の研究者にとっては、自身の研究を展開できるだけでなく、多分野の研究者との人的なネットワークも構築できる。この成果を踏まえて、科学研究費助成事業など次の研究に展開できる。この研究制度は、ぜひいまの規模を堅持していただきたいと思います。

吉田　それはそのつもりです。私自身も民博の共同研究制度に育ててもらったという認識をもっています。中堅の研究者にとっては、自分がたどり着いたテーマを同世代、それからもっと若い人たちと一緒に展開していくという、大変ダイナミックな研究の動きにつながるものですし、若い人たちにとっては間違いなく研究者としてのトレーニングになっています。これは民博がある限り、ずっと続けていかなければいけない機能だと思います。

人間文化研究機構の基幹研究プロジェクトとして進められている地域研究については、北東アジア地域研究、南アジア地域研究、そして現代中東地域研究が民博に拠点を置いて実施されています。

2020年度に限ってみても、「北東アジア地域研究」は、Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches と題して国際シンポジウムを、カザフスタン、ベルギーの研究者とともに、オンラインを併用しておこなっています。また、館内での研究会のほか、熊本県五木村において民博との共催による展示を開催するとともに現地の住民との合同の公開セミナーを計5回開催したことで、地域社会の振興に大いに貢献しています。

「南アジア地域研究」は、今年度の新型コロナウイルス感染症の流行により国際的な研究交流が困難な状況でも、インドと結んで感染症とインド社会に関する国際セミナーや、東アジア・東南アジアの南アジア研究機関とのコンソーシアムによる国際ウェビナーの開催などによって、国際的研究ネットワークの強化を図ることに成功しています。

「現代中東地域研究」は、秋田大学拠点とともに、オンラインで開催された日本中東学会年次大会（2020年8月29日）および英国王立人類学協会主催の国際学会でパネルセッションを組織したほか、学術協定によるフランス社会科学高等研究院との国際共同研究の成果を外国人研究者と共編で刊行しています。

日本学術会議の提言も踏まえ、日本全体で進んでいる地域研究の1つの核となっている民博の3つの拠点は、国際性という点では、それを一番先導するような位置を占めていると思いますし、それぞれの地域の課題を解決するための基盤づくりが着実に進んでいます。

ただ、これは、人間文化研究機構の他のプロジェクトにも共通していえることですが、各機関の研究活動とは別に、いくつものプロジェクトがそれに覆いかぶさるようなかたちで走り、各機関の研究活動として位置づけられる仕組みになっていなかったことが反省点として挙げられます。そのために、こうしたプロジェクトの活動に従事する研究者の負担と負担感が過大なものになっていったというきらいがあります。第4期においては、仕組みを大きく変えて、むしろボトムアップで、各機関が「これをやりたい」というプロジェクトを機構のものとして立ち上げて、それを地域研究なら地域研究という枠でくるんで、機構の事業として実施するけれども、あくまでもそれは各機関が主体的に進めていくプロジェクトだという位置づけに変えるように人間文化研究機構に提言をしています。それが受け入れられて、いま機構でまとめている将来構想ではそういう位置づけに変わってきています。

卯田　それは良いと思います。機構の存在意義は、各機関の研究パフォーマンスを最大化することです。機構から指示するのではなく、各機関がやりたいものをサポートする役に徹する必要がある。

吉田　その通りです。各機関はそれぞれに国際的にも評価される立派な仕事をしているので、その成果を機構は自分らの成果として外へ売り出すだけでよくて、自分たちで何かをしようとは思う必要はないのだということを、はっきりと機構側にも伝えています。

民博の博物館活動はどうだったか

卯田　では次に進めます。民博のもう1つの柱である博物館活動についてお伺いします。博物館活動のなかの展示については、たとえば『驚異と怪異―想像界の生きものたち』や『ビーズ―つなぐ・かざる・みせる』も含め、共同研究の成果を展示に展開して多くの来館者を得ました。そのほか、震災と復興に関して『復興を支える地域の文化』の展示や「津波の記憶を刻む文化遺産」のデータベース、『津波を超えて生きる』などの展示も話題になりました。民博の研究展示に関してはどのようにお考えでしょうか。

吉田　第3期に入り、その1年目、2017年3月に本館展示の全面改修（新構築）が完了しました。10年がかりの大事業でしたが、その後も不断の展示改修を謳って、いまも研究の展開に合わせて追加の改修を続けています。とくに昨年度は、音楽・言語展示の改修がおこなわれ、音楽展示場はまったく新たな装いで生まれ変わりました。

全面改修にあたっては、2007年に第2次展示基本構想をまとめて、2008年から改修作業にとりかかったわけですが、その構想に沿ったかたちの展示を全展示場で完遂できたと考えています。また、改修が一段落した2017年以降は、次世代型の電子ガイドと連動したビデオテーク・システムの開発・導入を進めてきました。全体として、博物館展示を外に向けて開いていくという作業を展開できてきたと考えています。

新たに整備したビデオテークシステム。利用者が興味をもった資料に関わる番組を紹介する。

外に向けて開くというのには、いくつかの側面があります。

まず、展示の内容です。開館以来のかつての民博の展示は、もともとは新旧（しんきゅう）都鄙（と ひ）、新しいものと古いもの、都、都市部と鄙（ひな）、地方という軸を立てて、各地域展示場でそれを同じようなレベルで実現しようとしていたのですが、最終段階で各地域の特徴を示すために、プラスチック導入以前の文化を示すという方向に修正がなされた。ようするに、伝統的な生活を示すような展示を展開することになって、結果として、それぞれの地域の特徴や独自性は強く出た一方で、その地域と外の世界とのつながりがまったく見えなくなってしまった。それぞれの地域はそれぞれの地域固有の文化をもち、そのなかで完結して、変化のない社会だというイメージをつくってしまった。

そういう反省があって、現在の新しい展示に変えていったわけですが、その際、基本的なコンセプトを一から練り直し、新しく打ち出した方向性を全展示場で共有することにしました。

具体的には、

・世界諸地域の文化の多様性を尊重しつつ、その地域と世界、地域と日本のつながりがわかる展示
・歴史的展開の結果としての現代を示す展示
・同時代人としての共感を育くむ展示
・展示される側（私の担当したアフリカ展示ならアフリカ）の人びととの共同作業による展示

を実現しようという大きな方向性を打ち出したわけです。

この4つの基本コンセプトは、今回の本館展示全面改修を通じて貫徹できたと考えています。

世界とのつながりを示すとか、同時代人としての共感を育むとか、その地域の人と一緒に展示をつくろうといったことは、みな展示を外に開くという意味合いがあります。そして、そのことは、現在進めている展示情報システムの整備、とくに新しい電子ガイドとビデオテークを連動させて、しかも、そこで見た記録は、家に帰って自分の携帯電話とかパソコンでも確認できるようなかたちで、展示場とサイバー空間とをつなげていこうという動きにも同様にあてはまるものです。

博物館を外に開くというと、物理的にも、万博記念公園と民博の間にあったバリア（入園券を確認するための入口柵）を撤去して、万博記念公園駅から民博までバリアなしに真っすぐに来ることができるようにしました。10年越しの交渉を重ねて、ようやくそれが実現し、お客さまにスムーズに民博まで来てもらえるようになった、と思ったところにコロナ禍になったので、その成果はまだ確認できていないのは残念です。いままではあのバリアがあったために、お祭り広場までは来るけど、そこで引き返してしまう人が多かった。「その先に何か倉庫みたいな建物があるなとは思ったけど、それが博物館ですか」という人が、茨木市民とか吹田市民でも結構多いんです。そのバリアがなくなったということは、やはり博物館を外に開いていくという動きの1つで、それは実現できたと思っています。

とくに2019年度は、特別展「驚異と怪異―想像界の生きものたち」での実行委員長の山中由里子さんの大活躍もあって、28年ぶり、1991年以来の入館者で、間違いなく入館者数が30万人を超えると思ったんだけれど、新型コロナウイルス感染症拡大にともなう緊急事態宣言発出で2月末に臨時休館をすることになりました。このため、年度の入館者数は29万2,315人で止まってしまいましたが、それでも28年

特別展『驚異と怪異―想像界の生きものたち』のポスター

ぶりの数の入館者を迎えられたのはたしかです。しかも、その年から小中学校に加えて高校の生徒も入館料を無料にしたでしょう。それから、大学生は授業利用ではそもそも無料だし、キャンパスメンバーズに入ってくれている大学の教職員は無料だから、大学生自体、ほとんど無料と同じなんだけど、それだけ無料化を進めたのに、入館料収入は例年の1.5倍近く増えたんです。

そういう上向きのＶ字回復の途上で臨時休館があったので、この間の改善の動きの成果を確認するのはコロナ禍が終わってからのことになりますね。

卯田　これ以外にも、第3期でもJICAの博物館学研修を実施し、文化振興に関わる海外人材を育成してきました。また、民博が開発した情報メディア展示の技術によって、聖心女子大学など他大学の展示企画を支援しました。第3期では、博物館の技術を外に開くという流れも整備されたといえます。

JICA研修生による民博収蔵庫内での活動のようす。

吉田　そうですね。民博が展示をつくる過程で培ってきた技術や装置を、主として大学の博物館などの展示に組み込んで、とくに情報の部分で展示自体を高度化するお手伝いをしようということで、公募型メディア展示の事業を始めました。第1回目に採択した聖心女子大学には大変喜んでいただいて、しかも、聖心女子大学では、映像を多用したその展示がきっかけになって、映像を通じてさまざまなテーマを探求するという新しい授業科目までつくられた。そして、それがいまでも定着しているそうです。大変な成果が上がってきていると思います。

それからJICAの博物館学研修に関しては、今年でもう27年になります。この間ずっと継続して、JICAのいう発展途上国、援助の対象国から毎年、原則1カ国1人で10人、だから10カ国を対象にして3カ月強の博物館の研修をするという活動を続けてきたわけです。この事業を通じて、毎年、海外の博物館と博物館関係者との間の世界的・国際的なネットワークが更新され強化されてきました。その点でも、民博にとっては宝物のような事業です。国際協力という意味でも大きな成果を上げたと思います。

おかげで、我々は世界中のどこに行っても、民博でトレーニングを受けた誰かに会うという状況がほぼでき上がっています。しかも、研修の修了者が皆さん偉くなって、博物館の館長とか大臣になったりもしている。

卯田　私が北マケドニア共和国で調査を始めたとき、民博の博物館学研修を受けたゴルドン（Gordan Nikolov）さん

が北マケドニア博物館で管理職に就いておられました。現地では、ゴルドンさん経由で調査地に入ることができ、ほかの研究者とも広く知り合うことができました。おかげでバルカン半島の調査を非常にスムーズに進めることができ、感謝しています。JICA の博物館学研修は、このように民博の職員にとっても海外調査で非常にメリットがあると思います。

吉田　そうだと思います。博物館というのは、我々の研究の現地拠点として活用できるのです。日本の大学は、いまこぞって海外に現地事務所をつくろうとしています。ところが、海外の大学は規模が大きくて、小回りがなかなかきかない。そこを拠点にして何かをしようと思ったり、調査許可をとろうとしても、いくつもの会議を経ないといけない。だから、大学は、1年とか2年とか研究で長期に滞在するのであれば利用の価値があるけど、科研の研究などで大学を拠点にしながら調査をするというのはなかなか難しいところがある。

それに比べて、博物館は小回りがきく一方で、それぞれの国の行政組織でいうと、博物館と大学は組織の階梯としては同じぐらいの位置にあるので、政府とのつながりもつくりやすい。なので、現地の博物館は、我々の研究の現地拠点として協力してもらえるんです。これは民博が博物館をもっていることの大きなメリットの1つだろうと思います。その意味からも、JICA と共同事業の博物館学研修は、これからもずっと続けていってほしいなと考えているところです。

じつは、この研修コースは何度も継続が危ぶまれることがあったんです。このコース、もともとは1994年に始まったのですが、当初は「博物館技術コース」と言っていた。それがのちに、「博物館学集中コース」と名前を変えた。ただ、コースの名称で「博物館」が前面に出ているので、JICA 本部や相手国の政府関係者から見て、それがどう国際協力に結びつくかということが見えづらかったというところがあります。

だから、私も JICA に頻繁に講義や講演に行って、博物館というのは開発の拠点になりうるのだということを訴え続けた。現地の文化を知らずに開発しようとすると絶対にしっぺ返しを受けるし、そういう支援はけっして現地に根づかない。一方で、それぞれの博物館には現地の知識や経験が凝縮されているので、そこと一緒に事業を進めることで初めて開発の実も上がるということを、ずっと訴え続けたんです。そして、コースの名称も「博物館とコミュニティ開発」に変えた。名前を変えた結果、安定的な運営ができるようになったと思います。博物館はコミュニティ開発の拠点なんだと、JICA 側にも相手国の政府に認められるようになった。ですから、このコースはこれからも続いていくだろうと思います。

それから、博物館活動に関していうと、やはり2019年に京都で開催された ICOM（国際博物館会議）の世界大会 ICOM 京都2019のことを話しておかないといけません。ICOM の大会を日本で開催するのは初めてだったんですが、目標の3,000人を大幅に上回る5,000人近くの参加者があり、

ICOM 京都大会のシンポジウム「博物館とコミュニティ開発」（2019年9月3日、国立京都国際会館）。

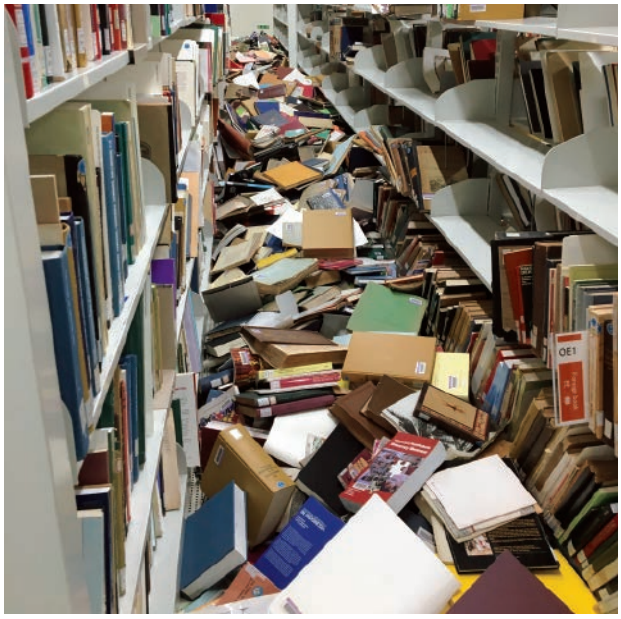
史上最多の参加者数を記録しました。この機会に、JICA の研修の名称と同じ、「博物館とコミュニティ開発」をタイトルにしたシンポジウムを、ICOM 日本委員会と民博の共催で大会の一部として実施しました。この集会では、JICA の研修修了者に登壇してもらって、それぞれの国での帰国後の活動について報告してもらい、コースの成果を検証するのと同時に、コミュニティの振興における博物館の可能性について議論を交わしました。このシンポジウムを通じて、民博の博物館学研修が国際的な認知を得たと考えています。

また、大会期間中の一日には、ICME（民族学博物館・コレクション国際委員会）と CIMCIM（楽器の博物館・コレクション国際委員会）のオフサイトミーティングを民博で開催しました。世界の民族学博物館の関係者計141人に、午前中は民博を見てもらい、午後には民族学博物館における「多様性と普遍性」についてシンポジウムを開いて議論を交わしました。夕刻のレセプションでは、多くの参加者から、「世界でベストの民族学博物館です」というお褒めの言葉をいただいて誇らしく思いましたが、その点でも、民博の国際的な位置づけが確認できたと受け止めています。

それから、ICOM の京都大会全体のテーマ、「Museums as Cultural Hubs（直訳すると、文化の結節点としてのミュージアム）」はもともと組織委員会の場で私が提案したものだったのですが、それが「Museums as Cultural Hubs」の理念を世界の博物館で徹底というかたちで大会決議に採択されました。この「文化の結節点としてのミュージアム」というコンセプトは、民博の掲げている「フォーラムとしてミュージアム」という考え方から導かれたものなのですが、その点でも、民博の活動の国際的な先導性を確認できた出来事だったと思っています。

地震、台風、新型コロナウイルス感染症

卯田　第3期といえば、2018年に大阪府北部地震が発生し、台風21号の被害も受けました。また、2020年初めから新型コロナウイルス感染症が拡大し、私たちの生活に大きな影



大阪府北部地震は展示場や図書館などに大きな影響をもたらした。写真は図書が落下した書庫のようす。

響を与えています。民博でも長期の閉館を余儀なくされ、共同利用機関として来館者や館外研究者に不便をかけました。このような未曾有の事態のなかで、民博ではコロナ禍の行動規範を定め、オンライン会議室システムや換気装置などを迅速に導入しました。館長として地震、台風、感染症を対応されたわけですが、いまどのような感想をお持ちでしょうか。

吉田　何が起こってもびっくりしなくなりましたよ。2018年の大阪府北部地震では3カ月間の臨時休館に追い込まれました。書庫では、30数万冊の図書が落下し、その再配架が必要になりました。また、展示場では防煙垂れ壁に亀裂が生じて、展示場全体にその破片や剥片が散乱し、展示物も、一度全部取り外してクリーニングをし、もう一度設置するという、展示会場を一からつくるのと同じ作業も必要でした。館の職員の皆さんは一丸となって本当によく対応してくれたと思います。そして、台風のときは、民博の建屋の各コーナー（角）に取り付けてあるアクリルカバーが鉄枠ごと飛ばされ、トーテムポールは羽がもぎ取られてしまいました。

大阪府北部地震は6月18日に起こって展示の再開が9月13日ですから、約3カ月間の休館でした。その後は、去年の新型コロナウイルス感染症の拡大で4カ月間の休館がありました。そして、今年になって2カ月間の休館です。だから、足すと9カ月間ほど臨時休館していたことになります。4年の任期のうち、ほぼ1年は閉めていたという感じですね。外からは休んでばかりいたとみえる。私が歴代館長の臨時休館最長不倒記録をずっと塗りかえ続けています。

でも、じつは普通に館を開けているときが一番スムーズで、閉じているときのほうがはるかに忙しいのです。本当に皆さんはよくやってくださったと思います。地震からの復旧はもちろん、コロナ禍になったときも、アクリルのシールドなど、普通は要らないような備品をまず一斉にそろえなければならなかったし、手指消毒用のアルコールの確保だけでも大変でした。換気のシステムの改良も大仕事でした。各部屋の換気量を計測して、換気量から得られる部屋の許容人数と、面積から得られる部屋の許容人数のうち許容量の少ないほうをコロナ禍における新たな定員として設定するという作業を全館にわたって実施しました。そのうえで換気量の一層の改善が求められる部屋に関しては、換気設備の増強工事を順次進めました。これだけ徹底した対応をしているところはないのではないかと思います。

卯田　私は公募型の共同研究を進めていますが、コロナ禍で研究会の対面開催はできなくなりました。ただ、オンラインによって継続して開催できたため、各地にいるメンバーとともに研究を進めることができました。ほかの共同研究もオンラインを通して開催しており、民博の共同利用・共同研究拠点としての機能を担保するという意味でも素早い対応でした。

吉田　外部の共同研究の代表者からも、セミナー室や演習室で新たに整備したオンラインのシステムが非常に使いやすいということで喜んでもらっています。

講堂のほうも、耐震改修も終わって、インテリジェントホール化が実現しました。ライブ配信ができるシステムを整えましたし、多言語対応の同時通訳装置も導入しました。このホールでは、物理的なフォーラムの場をつくろうとしたのです。空間的には、舞台を前方にして、ひな壇式の観客席とぶつかるところにまで広げてしまって、文字通り、ひのき舞台にお客さまにも上がってもらって、演者と観客の区別を取り払えるようにしました。ラウンドテーブル型のシンポジウムだったら、お客さまにも周りを囲んで参加してもらえます。パフォーマンスに関していうと、民博が対象にするようなパフォーマンスは多くの場合、ステージの上で上演するというものではなく、もともとは村の広場など、屋外で上演されていたようなものが多いですから、その環境を再現できるようにしたという部分もあります。2000年代、ロンドンから始

耐震改修工事によりリニューアルした講堂。

まり、ニューヨークで盛んになった、観客と演者を一体化させるイマーシブシアターにもうってつけの会場です。

目的に合わせて、舞台上のレイアウトは自由に変更できる、多目的の空間ができあがりました。いざ、いろいろな目的に使ってもらおうと思ったら、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため臨時休館をせざるを得なくなり、展示再開後も、ワークショップ型の集まりができないでいるので、まだ新しいホールの真価を発揮できないままの状態が続いています。

卯田　ペストが公衆衛生を誕生させ、コレラが都市整備を促し、天然痘が医学にイノベーションをもたらしました。いつの時代も危機が社会や生活を強靭化させてきました。今回のコロナウイルスは呼吸器系の感染症ということもあり、密を避ける対応が採られました。コロナが終息したあとも、いまのオンライン会議などの技術は選択肢の1つとして残ると思います。

吉田　そうです。それは大阪府北部地震のときも同じで、地震で天井の防煙垂れ壁パネルにひびが入ったので、ひびが入らないような素材にかえましたし、ガラスの垂れ壁の一部が割れて破損したため全部フィルムにかえました。防災の面でいっても、民博は、より強靭な建物に生まれ変わってくれたと思います。今回のコロナ禍においても、結果的には、リアルとバーチャルを組み合わせる新しい会議システムの導入ができました。それぞれの被害のときに、それを繰り返さないような仕掛けはつくれてきたのではないでしょうか。

第3期の課題は何か

卯田　とはいえ、第3期の課題もあります。ちょうど過渡期のいまが課題を改善できる良いタイミングだと思います。たとえば、さきほど成果刊行物が多いと言いました。しかし、多くは編著です。個人研究に基づく単著が少ないのはやはり気になります。民博は博物館ではなく「博物館機能をもった研究所」です。そこで研究の基盤となる個人研究とその成果となる論文や図書が十分に発信されていない点は、やはり改善の余地があるのではないでしょうか。そのほかにもいろいろな課題はありますが、どのようにお考えでしょうか。

吉田　おっしゃる通り、シンポジウムをもとにした編著はどんどん出ていくけど、単著が少なくなっているというのは気になっているところです。1つには出版界全体の元気のなさというのもあって、紙媒体離れというような雰囲気という外的な要因があるのもたしかです。けれども、単著の成果の見える化というのが十分にできていないというか、お互いにそれを見て確認して切磋琢磨するという機会が減っているという気はしますね。かつての『民博通信』のように、各号で教員のその半期（以前は4半期）の刊行物の一覧表を掲載することも考えてみましょうか？

単著の出版については、どんどん後押ししたいと考えています。とくにこのコロナ禍にあっては、ふんだんに書ける時間があるわけですから、もっとみんなが切磋琢磨するような状態で書いていってもらいたい、刊行していってほしいという思いがあります。それを後押しする仕組みをさらに整えなければいけないと思っています。

卯田　全体として教職員の数が減少しているなか、それまで以上の仕事をこなす。結果として、一人ひとりの負担が増加するという状況です。民博では第4期に向けて2020年末に研究活動と博物館活動の将来構想ワーキンググループ（WG）が組織されました。その WG の提案書には、いずれも活動のスリム化が言及されています。それほど民博の活動はメタボ化していて、無視できない症状だということです。

吉田　今後の課題のなかでも、教職員の負担の軽減というのが、一番大きいと思っています。一度、民博を離れて大阪大学に移り、ふたたび民博に戻ってきた職員に「前にいたときと比べてどう？」と聞くと、「本当に忙しくなっている」と、そう言います。

かつての民博の研究活動を振り返ってみると、研究のプロジェクトは、みんなそれぞれ科研はもっているけれども、そのほか共同研究を1本、自分で走らせていた。それに加えて、谷口財団国際シンポジウムシリーズが2つあって、1つは文明学部門、もう1つは民族学部門で、それぞれを各教員が順番に担当していくので、いつもプロジェクトを抱えているわけではないんですよね。基本的にこういったものが共同研究活動の柱だったので、そこでの成果をそれぞれ自分でまとめて単著にして出していくだけの余裕が間違いなくあったんだろうなと思います。

そのときと比べると、谷口シンポにあたるようなものがいまの特別研究でしょうか。当時はまだフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトはなかったし、さらに、さっきの地域研究とかネットワーク型基幹研究など人間文化研究機構のプロジェクトもなかったわけですから、明らかに現在では、研究活動のほうでも負担が2倍以上になっているのではないでしょうか。

博物館活動はご存じのように、新構築を始めるまでは、いまから四十数年前につくった展示をそのまま維持していたから、多くの研究者はそもそも展示については何も関わることがなかった。本館展示の全面改修（新構築）を始めた段階から展示に向けた収集がすごく多くなったという状況がありますよね。展示の改修にも時間を割かないといけなくなって、みんな忙しくなった。特別展は1989年から始まりました。民博の開館後、十数年は特別展・企画展がなかったんです。特別展示場ができて、特別展、企画展を始めてからは当然、特別展に連動した活動でも負担が増大してくる。管理職になって皆さんの働きぶりを見ていると、やっぱり過重な負担がかかっているとつくづく思います。

そういう意味からも、いろいろなプロジェクトの枠は用意しておくけれど、十分自力と余裕があってやってみようと思

ったときに、その枠を使って研究や展示ができるというかたちにしておく必要があるのだと考えています。さきほど言っていたように、プロジェクトがうえから降ってくるような状態ではなく、やりたいときにそれが実現できる。そういう枠を用意しておくのが大事なのだと思います。

それぞれの教職員が、自分のできる範囲の活動を思いっきりできる環境をもっと整える。拡大一辺倒ではなしにね。それが必要なんでしょうね。全体の活動をスリム化というかスマート化を図るというのは、第4期に向けて、教職員の健康と命を守るために大事な作業だと思っています。

卯田　これは、民博に限ったことではなく、日本の学術機関の普遍的な問題かもしれませんが、人文系においても短期的でわかりやすいフレームに収まる成果が求められる。そのフレームに収まらないものはまるで存在しないかのようです。もちろん、評価のない研究はありえない。ただ、一般に研究のタイムスパンが長い人文系の研究者で、現状を問題視しない方はいないのではないでしょうか。

とくに懸念しているのは、いま民博で5年後、10年後に花開くような基礎研究ができているのかという点です。失敗することもあるでしょうが、目先の成果にとらわれない地道な研究や問いを磨く作業に投資する必要がある。最初の発想を生み出すのは個人です。その意味では、WGが示すサバティカル制度の導入など、さまざまな改善方法があると思います。

吉田　5年後10年後に花開く基礎研究というのは、やはり各個人研究の部分だろうと思います。それができるような仕掛けづくりをもっと後押しする必要があるんでしょうね。目先の成果や経済効果、社会的インパクトばかりを評価して、地道な基礎研究がややもすればなおざりにされるいまの風潮は、率直に言って学術の危機だと考えています。

そもそも評価の体系が何十年もかかってようやく日の目を見るような基礎研究を救い上げるかたちのものになっていない。民博の場合は、どんなかたちで評価されようが、この民博の活動はこれからの社会に絶対に必要なものなので、その部分は自信をもっていていいと思っているんです。だから、政府、国から言われるから、こういう成果を上げないといけないというふうにはまったく思っていないし、そういうかたちの成果の発信もする必要はないと思っています。粛々と我々の活動を外部に伝えていけばいいと考えています。

一方で、フォーラム型情報ミュージアムの構築も含めて、もっと国際発信を活発化する必要はあると思っています。国際マルチメディア・オンラインジャーナルの『*TRAJECTORIA*』を刊行したのも同じ理由からです。国際発信が不十分だというのは、たしかにサバティカルの制度がないということとも関係があるのかもしれないですね。

私自身は、1990年から1991年にかけて、当時の在外研究という枠組みでロンドンへ行って、ロンドンにいたおかげで、たとえばアメリカのどこかの大学に行くよりもはるかに研究のネットワークが広がったという実感があります。というのも、私は、当時は独立の博物館施設をもっていたBritish Museum（大英博物館）の民族誌部門、Museum of Mankindに客員研究員として滞在したのですが、とくにアフリカに関する人類学の研究者や、博物館に在籍している人類学者が、世界中からロンドンに来たら必ずMuseum of Mankindに寄ったので、そこにいると世界中の研究者と会える。そして、それでネットワークができる。その後の私の研究は、ずっとこのロンドンで築いたネットワークをたどって展開してきているのです。

ただ、そうやって築き上げた人的なネットワークがいまどんどん消えていく。私のカウンターパートだった研究者はもうみな定年で退職してしまっています。親しくずっとつき合ってきた研究者で、館に残っているのは私ぐらいです。ですから、そのせっかく築いたネットワークをぜひ更新したいし、若い世代の皆さんに更新していってほしいんです。それには、やはりサバティカルで少なくとも1年ぐらい海外にいないとなかなか難しいでしょうね。サバティカルの導入というか復活。真剣に考えてみたいと思います。

第4期に向けて

卯田　では次に、2022年度から始まる第4期の展望についてお伺いします。第4期に向けては、すでに将来構想WGによってさまざまな提案がなされています。たとえば、フォーラム型情報ミュージアムを拡張する人類文化アーカイブズの構築、現代の民族間関係を問いなおす特別研究、SDGs（持続可能な開発目標）に対応した博物館のユニバーサル化に関する取り組みなどです。こうした第4期についてどのような展望をお持ちでしょうか。

吉田　将来構想検討WGからは、研究活動についても博物館活動についても、フォーラムという概念を継承しつつ発展していくという答申を出していただいたので、それを受けて1つの方向性を固めました。博物館活動と研究活動を有機的に相互連関させる場として「人類の知のフォーラム」というものをつくる。そして、そのフォーラムでの活動を通じて、グローバル共生社会に向けての指針を示す「グローバル人間共生科学」を創成するというのを第4期の民博の活動の柱、ミッションとして打ち出すことにしました。

いま明らかに私たちは文明の転換点に立っていると思います。とくに今回、新型コロナウイルス感染症が地球規模でほぼ同時に世界に広がるという状況のもとで、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がり、さまざまな新たな分断も生じてきています。それだけに、地球上の人びとがお互いに敬意と共感を抱きながら共に生きる世界を築くこと、文字通りグローバルに人びとが共生できる社会をつくることが強く求められています。その実現に向けての指針を示すことが、この時代における文化人類学、そして民博の課せられた大きな使

命だと思うのです。ある意味、これからは「民博の時代」なんだと言ってもいいすぎではないかもしれない。

「民博の時代」というのは、いろいろな面でそう言えるのだと思います。1つは、人類学研究のなかでモノの研究への回帰ということが大きく進んできたでしょう。マテリアリティの研究と総称されるものです。人類学というのは、そもそも博物館と一体となって、というよりも、博物館のなかから生まれてきたような学問だと思うんです。けれども、20世紀に入って完全に人類学の動きとモノの研究の動きが分かれてしまった。

人類学がモノに着目するということがまったくなかったわけではありません。けれども、20世紀の人類学はモノ自体に焦点をあてたのではなく、メッセージを伝える記号としてモノを捉えた。構造機能主義もそうだし、構造主義もそうだった。そうではなく、モノ自体を人間との関係から考えてみようという方向に、この間、大きな転回がおこってきた。そうなれば当然、博物館の活動と人類学の活動が接点をもつような状況が生まれてくる。それも含めて、「民博の時代」がまた来たという認識があります。だから、二重の意味で。

それから、モノへの接近という動きは、もう1つ、人類学とアートの接近という動きにもつながってきました。マテリアリティの研究の一環として、人類学がもう一度アートを研究の対象に据えるようになってきた。それだけではなく、アーティストたちがどんどんコミュニティに根ざした活動をするようになって、フィールドワークをやり始めた。そうでないと作品がつくれないという状況が生まれてきたのです。だから、アーティストの活動と人類学者の活動が重なってきている。これをアートのエスノグラフィック・ターン（ethnographic turn）つまり「アートの民族誌的転回」と呼ぶ人たちもいます。まさにそうだと思うんですね。こうして100年ぶりくらいに人類学とアートが接近してきた。そういう意味でも、改めて「民博の時代」が来たという認識をもっています。

私自身は「アート」にあまり振り回されるのは嫌なので、すべて「イメージ」と呼んで、イメージというものを人類学的に考察するという作業をしたいと思っています。そのイメージというのは、視覚的なビジュアルアートだけではなく、音、音像も一種のイメージでしょうし、アウトプットされたものではなく、心のなかに思い描くイメージ、つまり心像、心の像と言われるものもイメージの1つでしょう。そうなると、イメージの人類学的な研究というのは、認知科学とか脳科学と連動してくると思うんです。

そんなことを考えていたときに新型コロナウイルス感染症が地球規模で一気に広がった。卯田さんも先程おっしゃっていたように、振り返ってみると、文明の大きな転換期には、常にといっていいほど、感染症が何らかのかたちで関わっていた。

しかも、そのように人類の生存を脅かす感染症には、1つの共通点があります。それは、その大部分が、動物由来の感染症。いわゆる人獣共通感染症だということです。ペストはネズミ、インフルエンザはアヒルなどの水禽、SARS はハクビシン、エイズはサル、そして今回の新型コロナウイルスの場合は、コウモリに由来すると推定されています。

ウイルスや細菌というのは、通常の状態では基本的に人間と平衡状態にあるのでしょう。それが環境に対する何らかの攪乱、多くは人間による攪乱の結果、家畜や家禽そして人に侵入して感染症を引き起こすのでしょう。だから、この感染症の問題と文明の関係を考えるときには、いままでは人間と文明の関係を考えていれば済んでいたわけですけれど、これからはウイルス、細菌から動植物まで含めた「生命圏」全体を含めたかたちで考えないといけないのだと痛感しています。

そうした問題を考えようと思えば、当然、感染症の専門家、獣医の人たちをはじめ、遺伝学の専門家、分子生物学の専門家たちと連携しないと研究を進められないだろうし、必然的に分野横断型・文理融合型の研究を進めていかないといけないでしょう。そして人類学というのは、そもそも総合的な学なのですから、そういう分野横断的な研究の要（かなめ）、結節点の役をになうことができるのではないかと思います。そういうことも含めて、これから、人類学の時代、「民博の時代」が来ているような気がしているのです。

第4期に向けては、人類学がそういう役割を果たすような位置に立たされてきているのではないかと思うのです。特別研究に「現代文明と感染症」の緊急枠を設けたときの思いは、そのあたりにあったのです。それが「民博の時代」ということの、もう1つの意味です。

卯田　「民博の時代」でいいますと、よく民博は「がらくたばかり集めている」と言われることがあります。実際、収蔵庫を見ても日用品や生産道具、農具や漁具が多く収蔵されています。ただ、考えてみれば、文化や社会、技術が変化するとき、まずそうした日用品や生業道具が「がらくた」になる。つまり、民博では人類文化の変容動態の最前線を、生活や生業、衣食住に関わる物質文化から問うことができる。美術品や工芸品などは変化しないことに価値を置いている場合もあり、そこから社会変化をダイレクトに問うことは難しい。この点は、がらくたの強み、民博の強みかもしれません。この言い方が負け惜しみに聞こえないように頑張らないといけないですね。

吉田　民博は、基本的に同時代のモノを集めてきた。そして時を重ねるにしたがって、それぞれの同時代のモノが全部、歴史の層になって民博にたまってくる。その点は、大枚をはたいて19世紀の作品を買うというようなコレクションをしている館とは全然違います。だから梅棹忠夫さんは、「民博は人類の遺伝子プール、人類のつくり出したモノの遺伝子プールだ」という言い方をしていた。民博のコレクションを通

じて、それがどういうふうに継承されていくのかということを見ることができるようになるんだと。そういう話をしていました。まさにそうだと思いますね。これだけ同時代のものを世界全体にわたって集めてきているというところはほかにないのですから。

それから、第4期に向けての大きい課題というと、やはり、この博物館の建物の老朽化、本体改修です。いま全面的な改修に向けた計画づくりを進めています。

さきにフォーラムという言い方をしましたけれども、そのフォーラムというのは誰もが集えるというのが本当なので、フォーラムの概念というのは、そのままインクルーシブデザインとユニバーサルデザインにつながってきます。ですから、建物全体にユニバーサルデザインを反映させるというのも、本体改修の際の1つの重要な方向性だと思っています。

第4期の人間文化研究機構のプロジェクトとして、民博から提案したのが、「コミュニケーション共生科学の創成」というものです。民博に置かれていた手話言語学の日本財団助成研究部門が2020年度で終了しました。コミュニケーション共生科学というのは、その手話言語学の発展形として、国立国語研究所と民博を拠点とする研究プロジェクトとして提案したものです。

手話言語学研究部門のときには、聾つまり聴覚障害が中心の研究課題だったわけですが、コミュニケーション共生科学のプロジェクトでは、広瀬浩二郎さんにも民博の拠点に入ってもらって、視覚障害も含めたさまざまなコミュニケーションの負荷を克服して、グローバル共生社会の実現につなげることを目指しています。ですから、民博の博物館活動は、このコミュニケーション共生科学の研究成果を社会実装する場というふうにも言えます。

展示のユニバーサル化は、博物館におけるフォーラムの実現の重要な方向性の1つとして位置づけられるように思います。

卯田　特別研究やフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトを含め、今後もソース・コミュニティの人たちと一緒に研究を進めていくという方向性がよくわかりました。これは、広い意味でユニバーサルな博物館を目指すということになり、「誰ひとり取り残さない」という SDGs の考え方とも融合します。それでは最後に、第4期に向けて、館長ご自身が目指すものをお伺いします。

吉田　これは館長になったときにも言ったことですが、私にとって民博はずっと夢を実現できる場でした。やりたいことは全部やれた。民博は教職員一人ひとりにとってそういう場であってほしいと思っています。みんなの夢が実現できるように背中も押しますし、そこにハードルがあるのなら、そのハードルを取り除くかたちで、事業のスリム化・スマート化も必要なんだろうなと思います。

今日言ったように、フォーラム性が民博のなかで定着してきて、さまざまな活動に徹底するような状況が生まれてきていますので、これからはその成果の発信がより容易にできるようにサポートする仕掛けをつくっていきたいと思っています。

卯田　ありがとうございました。館長に第3期の成果と課題、第4期の展望をお伺いしました。民博の活動は多方面にわたっており、今回は取り上げられなかった活動も多くあります。今後の活動につきましては、この『民博通信 Online』で継続的に発信していく予定です。今後もよろしくお願いいたします。　（インタビュー日：2021年6月24日）

黒川紀章デザインの民博は今年（2021年）で築44年を迎える。